鎮江日中生態循環型農業新技術普及会が成功裏に閉幕

取材　柯隆

7 月 3 日～5 日、市政府主催、日本農山漁村文化協会、市科学技術協会、市農林局実施の「2008 中国・鎮江日中生態循環型農業新技術普及会」が成功裏に閉幕した。日本及び国内各科学研究機関からの約 20 数名の生態循環型農業分野の専門家、関係者が出席した。

大会は日本人専門家 12 名、国内の専門家 10 名を招き、10 項目の技術協力協定を結び、10 以上の新技術を導入した。開幕式では、中国工程院アカデミー会員・南京農業大学教授の張斉生氏は「バイオマスの高効率・無公害の資源化利用技術及び活用」、日本農学会元会長の熊澤喜久雄氏は「日本の環境保全型農業の発展と資源循環」をテーマに、講演を行った。また、市の関係部門は日本側と多項目にわたる生態循環型農業新技術の協力に関する協議書を結んだ。そのうち、「農薬節約の果樹病虫害防除技術」、「天敵利用及び病害虫抑制技術」、「乳牛の健康飼養技術」、「堆肥づくり及びキュウリの良品質・高収量栽培技術」、「アイガモゼロ日放飼技術」、「有機農業技術」等の生態循環型農業新技術の導入が含まれている。

一方、「普及会」効果の確保とともに、さらに生態循環型農業技術の産業化、及び新たな農業産業の育成を目指し、市政府は今年度「科学技術予算」の中で、初めて「鎮江市生態農業循環農業重大科学技術に関する特別予算」を設置した。限られた予算を活用し、重点的に生態循環型農業新技術の普及をサポートする狙いという。この措置を通じて、農村のもつ各種の生態要素を全体的に把握・計画し、総合的に開発し、さらに農村の耕種・養殖業による廃棄物と農産物を原料にする工業から生み出される廃棄物を十分に活用し、害を利に、廃棄物を宝物に変え、農業生産による環境への負担を軽減することが期待される。さらに、社会主義新農村建設の中で、生態循環型農業の発展に力を入れ、省エネ、減汚染の目標に、限られた農業資源を持続可能的に利用する形にし、「普及会」の狙いを確実に実現するという。

（「鎮江日報」2008 年 7 月 9 日）